

次のステップへと歩み出すお子さまを支えるために

校長 相川 保 敏

本日は、お子様のご卒業、誠にありがとうございます。六年間の小学校生活を無事に終えられたことは、お子様ご自身の努



力はもちろん、日々温かく支えてこられた保護者の皆様のご尽力の賜物です。

六年前、小さな背中で校門をくぐった子どもたちは、今、心も体も大きく成長し、それぞれの進路へと歩み出そうとしています。この間、学習や行事だけでなく、友との関わりの中で多くの経験を重ねてきました。思いが通じ合った喜びもあれば、行き違いや葛藤に悩んだこともあったことでしょう。そうした一つ一つの経験が、自分を見つめ、相手を理解しようとする力となって培われています。

中学校での生活を間近に控え、子どもたちは期待と同時に不安や戸惑いも感じていることでしょう。大人の力を必要とすることもまだまだあると思います。しかし、個人差はありますが小学校高学年から中学生の頃は、親や大人の指示に反発し、自立心や自我を確立しようとする第二反抗期に入ります。親子の関係がこれまで以上に難しくなってくる中で、よりよい距離間、関係性を築いていくことが何より大切となります。これらの大切さをわかりやすい言葉で表現した「子育て四訓」という先人の子育ての知恵があります。

子育て四訓

- ・乳児はしっかり、肌を離すな
- ・幼児は肌を離せ、手を離すな
- ・少年は手を離せ、目を離すな
- ・青年は目を離せ、心を離すな

子育て四訓が示す最も重要な点は、発達段階に応じて親の関与の度合いを調節するということです。

小学生から中学生は少年期にあたりますので、親子の関係は「手を離す」が「目は離さない」という距離感・関係性が望ましいとされます。自立心が強まり、友人関係や学校生活において親の直接的な手助けを必要としなくなります。しかし、親は子どもの様子を注意深く観察し、困難に直面したときには適切に介入できるよう、目を離さずに見守ることが求められていると言えます。「離す」という概念は、決して愛情を減らすことや無関心になることを意味しません。むしろ、子どもへの信頼と尊重していくことの表現と言えます。具体的には、第二反抗期の子どもたちへのかかわり方として次のような点に配慮していくことがよいとされています。（できそうでなかなかできませんが…）

- ・干渉しすぎず、一歩引いて見守る
- ・批判や叱責を避け、聴くことを重視する
- ・共感し、気持ちや感情に寄り添う
- ・反抗的な態度にも、冷静さを保つ
- ・生活のルールは話し合って決めておく

我が息子も中2の時に親に反発し、家の壁に穴をあけました。今は、反抗期の記念として残してあります。直面しているときは不安と心配ばかりでしたが、一般的に言われるように、高校生になる頃には成長とともに反抗期は徐々に収まりました。

「手を離し、目を離さず」という距離感、関係性を保ち、子どもを一人の人間として尊重し、信頼していく関係を構築していったほしいと願っております。

最後になりましたが、保護者の皆さまには長年にわたり、本校の教育活動にご理解、ご支援をいただき誠にありがとうございました。卒業後もお子様にとって小学校が故郷のような存在でありたいと願っております。どうか今後とも、本校を温かく見守っていただければ幸いです。